

世界の著名な特許にみる ————— 第16回

世紀の発明事業列伝

〈その思いつきが、時代を動かす〉

“からくり儀右衛門” こと田中久重 その4
大坂移住と京都移住～どん底からの再起・良縁の人生転機～
大ヒット発明「無尽灯」他・「機巧堂（カラクリドウ）」開
店・ギエモンの師「戸田東三郎」・京都文化サロン「以文会」・
土御門家入門と近江大掾（天下一職人称号授与）・東芝未来
科学館のご紹介



芸術・科学・知財クリエイター・弁理士（雅号）

大樹 七海

1. はじめに

今号（連載第16回目）は、ギエモンの36歳～51歳まで、「ギエモン壮年編1」を取り上げます。前々回の連載14回目「ギエモン青年編（16歳～35歳）」に続く回ですが、その青年編では、ギエモンが、からくり巡業ショーにより、全国的に“からくり儀右衛門”として有名となり、天下一の名声を得るところまでをお伝えしました。

今号の「ギエモン壮年編1」では、ギエモンは名実ともに、朝廷より天下一の職人の称号である“近江大掾（おうみだいじょう）”を賜ります。

そして、次回予定している「ギエモン壮年編2」では、いよいよ、現在にまで伝えられ

る”和時計の最高峰“「万年時計（万年時鳴鐘）」（重要文化財）を完成させるに至ります。そこで今号では、天下一の職人に至るまでに、いかにしてギエモンが、つまり、伝統的な「工芸職人・興行師」から、西洋の物理学・科学・天文学の最先端の理論的側面を身に着けた、「近代的な科学技術者・精密機器事業者」へと変貌していくのか、その過程を、丁寧にお伝えしていければと思います。

そこでキーとなるのは、ギエモンが青年時代に諸国巡業をして、目を付けて、移住する、最先端のビジネスの集積地である「大阪」と、その次に移住する文化人サロン文化の集積地である「京都」が果たした、産業技術者を育成する土地の存在です。

そこには、先見性・技術・ビジネス・人を

見極める目利きを持ち、かつ長期的な視点と人材育成の観点をも備えた、豪商（投資家・優良顧客）と技術系経営者達の相互助力による素晴らしいコミュニティが存在しました。

また、ギエモンが、逆境や不幸の中でも、そうした土地と人々の持つ力を、他力的に与えられるのではなく、自ら見出し、自ら掴み取り、自ら貪欲に学び続け、ころざしである、「世の中に役に立つモノ作りをしたい」（「有用なる機械を製造して、世の公益を広めんことを期する他、他に一点の利欲無し」連載第11回参照）を成すために、発明事業の存続と成長の活力に変えていく、その才覚、アイデア、エネルギーさをも、感じられる事に思います。加えて、ギエモンは家族や仲間思いで、そうした人間性とギエモンを取り巻く人々も大変魅力です。

では、今号「ギエモン壮年編1」を進めていくとしましょう！

2. 前々回からのおさらい

ギエモンは大阪にて、カラクリ・ロボットショー興行で空前絶後の成功を収めました。その後、江戸では記録的長雨続きのため興行が出来ないという大失敗を経験し、言う言うの体にて、故郷の久留米に戻ってきました（連載第14回）。

興行という性格上、天候に左右され、人の飽きも早く、また興行主の意向に従わざる負えない所もあるでしょう、そして常設舞台小屋を持っているわけでもなく、またそもそも、ギエモンは興行の道で大成したいのではなく、興行はあくまで研究開発資金の調達、という副業ポジションでした。そして天保時代に入ると、「天保の改革」による質素儉約政策による締め付けで、化政文化バブルも吹き飛び、興行開催には制限がかかり、冬の時代を迎えます。

しかしギエモンは、ついに、全国興行の過程で新規発明事業のタネを見つけ、その開発目途がつき、それを芽吹かせる最適な商いの

場所を見定めていたのです。それが大阪です。

第一章 大阪への移住

1. 最先端のビジネス都市・大阪

大阪はギエモンが既に何度も訪れている土地で、興行で大成功を収めた土地でもありました。

ギエモン、36歳、1834年（天保5年）に、家族を連れて、大阪上町に移住する決断を下します。

上町は、上町大地の上にある町の総称で、歴史的に灘波宮、大阪城を擁した政治・行政の中心地です。狭義には現在の大阪中央区の東側にあたります。当時11の寺町、うち2か所は天満、他は全て上町にあり、毎日どこかで縁日があり、知り合いの興行師達もいて、いざとなればカラクリ興行も行えるという算段もあったと思います。

上方の洗練された人物・物と情報・資金が集まる所にて、興行を兼ねた情報収集と技術開発の中で、この地に勝算を見出したのでした。

(1) 間重富（はざま・しげとみ）の功績ふたたび

前回連載第15回の特別編にて、幕府や朝廷の力量を凌駕する、民間の天文学集団、麻田学派（師：麻田剛隆、筆頭弟子：高橋至時、間重富、孫弟子：伊能忠敬ほか）について解説を加えました。学者・麻田剛隆のパトロンでもあり、優秀な弟子かつプロジェクトマネージャーでもある大阪の豪商、十一屋五郎兵衛こと間重富は、近代科学の実践ともいえる実証主義により、理論を裏付けるための観測機器類の開発を担いました。間重富が率先して、輸入に頼る測定機器類の国産化や高精度化を検討し、更に資材を投じて理科器具を製作できる人材を育ていった背景には、麻田学派がオープンイノベーション・タイプで、さらに先進的事項を急激に成長させるべき時期